

「オレ、『その声は、我が友、李徴子りちようしではないか?』を習得する」

タケがそう言ったとき、五月女は可哀想なものを見るような表情になり、俺はぼかんと口を開けた。

「……………習得って、どういう?」

たつぷり三十秒は沈黙してから、五月女が重々しく口を開く。けれど当のタケは、「そのまんまだけど」とけろりと答えた。

タケが言ったフレーズは、中島敦なかじまあつしの短編小説『山月記さんげつき』に出てくる有名な台詞だ。いわ

ゆる変身譚ものというやつで、虎になってしまった主人公の李徴と友人である袁蓼えんさんが出くわしたとき、虎の姿の李徴に向かって袁蓼が口にしたのが、くだんの台詞である。現代文の後期の単元で、どのクラスもちょうど冬休み前に習い終わったばかりだった。

けれど、高二にもなって「国語は睡眠の時間」と宣言して憚らないタケが、内容を覚えるほど真面目に授業を受けていたとはとても思えない。文体は難しいし、もし聞いていたとしても右から左の可能性が高いのに。

「このまえネットでこのフレーズ見てさ。コレだ! って、こーう、ガツときたんだよなー」
「そんなことだろうと思ったわ…………」

がくりと肩を落とす俺の横で、五月女はこめかみを押さえる。『山月記』の内容を理解しているのかおそろおそろ確認する五月女に、タケは「まー大事なところはなあ」と顎をかきながら言った。

『我が友』が『りちよーし』で、『りちよーし』は虎になっちまってー、でもダチだったから気づいた。そんな感じ」

「まあ、そう…………」

言いかけて、「いや、そうか?」と五月女は首をひねったが、思考を放棄するように小さく咳払いをした。

「でも、べつにそれ、魔法の呪文とかじゃないぞ。友だちの声を聞き取っただけで、袁蓼が虎語のわかる特殊能力持ちとかってわけじゃないし。ストーリーのなかのただの一台詞っただけで」

「Aさん? 友だちイニシャルなの?」

「なんでだよ!」

タケのすつとぼけた返答に、俺は思わずツッコんだ。五月女は完全にスルーしていた。「ま、難しいことはわかんねーけどさ。なんかできる気がするんだよな。オレらだし!」

そう言って、タケはからりと笑った。

それから毎日、タケはあちらこちらで袁蓼の台詞を言って回った。

といっても、タケが言うのはいつも「その声は」までで、そのあとは続かない。いわく、まだその段階ではないらしい。

相手も場所も問わないタケの特訓は、通学路の野良猫だったり、学校の前庭にある銅像だったり、ゲームセンターのぬいぐるみだったり、いろいろだった。ときには、コンビニの脇に放置されたペットボトルにまで、タケは「その声は」と迫った。

けれど、言い出したときのノリの軽さとは裏腹に、タケはいつも真剣だった。「その声は」もむやみやたらと口にするのではなく、声を発する前、相手に向き合った時点から、居合い斬りの達人みたいなオーラをいつも全身に纏っていた。

五月女はやっぱりなにか言いたそうな顔をしていたけれど、結局は諦めたようにタケの特訓を傍観していた。それでも別行動をしないのがなんとも五月女らしくて、俺はこっそり笑った。

突然始まったタケの特訓には、俺たちだけじゃなく、ほかの友だちや担任も困惑していた。下校前、スクールカウンセラーの先生が声をかけてきたこともあったし、タケのお母さんが学校に呼ばれていたこともあった。

だけどタケは、誰がどんな目を向けようが変わらなかった。そんなだから、はじめはざわついていた周りの人間も、次第になんだかんだと見守るようになっていった。

「今日は大河^{たいが}んちで特訓すんぞ」

下校中、タケが言うのに、俺たちは揃って振り返った。当事者の俺よりすばやく振り返った五月女は、さっそく眉を寄せた。

「またか？ さすがに迷惑だろ」

「なんでよ。おばさん、いつでもきてって言ってたじゃん」

「真に受けるなよ」

ヘラヘラ笑うタケに五月女は顔をしかめる。その間にも、タケは俺の家へと向かう角を曲がっていく。

「母さん、そういう社交辞令言わないから、ふつうに喜ぶと思うけど」

五月女はまだむっとしていたけれど、タケはそんな五月女の様子をまったく気にかけることもなく、ズンズン迷いなく進んでいく。そうして俺の家までの道すがらもときどき立ち止まっては「その声は」とはつらつとした声を響かせて、通りすがりのおばあちゃんを飛び上がらせた。

「ゆっくりして行ってね」

玄関先に出てきた母さんは、俺の予想通り、タケと五月女を見て、とても嬉しそうにそう言った。

律儀に仏壇へ手を合わせる五月女をほっぽって、タケはまっすぐに庭へと向かう。

「その声は」

犬小屋から引つ張り出されたぼこ太は、タケの言葉にクウンと首を傾げた。困り顔のぼこ太の頭を「悪かったな」とくしゃくしゃ撫でたタケが縁側から家へと入ると、五月女はまだ仏壇と向かい合っていた。

それからタケは、ハムスターのプチからばあちゃんのサボテンまで、家中のものに声をかけまくった。さすがに外でやるべきほどの声量ではないけれど、その代わり、研ぎ澄まされた集中力で紡ぎ出される「その声は」は、一回一回が気迫に満ちている。そんなタケにサボテンは沈黙を貫き、ぼこ太はクウンクウンと耳を揺らした。母さんは「またいつでもおいでね」と微笑んで、玄關で手を振った。

「……タケ。お邪魔するなら、手ぐらい合わせろよ」

うちから200メートルくらい離れた公園に差しかかったとき、それまでむっつりと黙っていた五月女が苦々しげにこぼした。

タケは首だけで五月女を振り返り、けれどそのままふいつと前を向く。そのままキョロキョロとあたりを見回し、いつものように特訓相手を探し始めた。

「タケ！」

「なんだよ」

「それも、いいかげんやめよう。無理だよ」

「いやだね」

きつぱりとタケが言うのに、五月女がぐっと押し黙る。ふたりの間で俺がおろおろしている間にも、目に見えそうなほど険悪な空気が満ちていく。

「イヤなら、もう一緒にいてくれなくていいよ」

「おまえ……っ！」

五月女が薄赤く染まる目をつり上げて、掴みかからん勢いでタケに腕を伸ばす。それを見て、俺は考える前にふたりの間に進み入っていた。

「やめてよ、タケ！ 五月女！」

俺が叫ぶと同時、小さなつむじ風が花びらを巻き上げながらふたりの間を吹き抜ける。

「……!?!」

突然のことに声を失ったふたりは、けれどすぐにぱっと顔を見合わせ、同時に叫んだ。

「大河！」

つむじ風は一瞬で消え、無風になった公園に花びらがくるくると下りていく。

タケは、明確ななにかを探して、あたりを勢いよく見回した。

「大河だ。ほら、大河だよ！ なあ、いまの聞こえたよな、五月女！ な！」

「……ああ、聞こえた」

呆然としたまま五月女が答える。夕方の公園にはタケと五月女以外に人の姿はなく、ふたつの影だけが濃く長く伸びている。

「おまえは仏壇にはいねーと思ってたけど、なんだよ、大河、意外とベタなもんになってんじゃない！」

タケはテンション高く五月女の背中をばんばん叩きながら、大口を開けて笑った。五月女の肩は小さく震えていた。

「だから言ったろ？ オレらならできる気がするって！ なあ大河！」

笑いながら、タケは俺がいるのとは真逆を振り返る。

「そっちじゃねえしー」

——まったく、あんなに特訓してたくせに、「その声は」はどうしたんだよ。

思い出したらなんだかおかしくなって小さく嘔き出すと、公園にわずかに積もっていた桜の花びらが、ふたりの足元でふわっと舞い上がった。